

在宅リハビリテーションチーム活動報告

○石田 真也¹⁾，千原 柁典²⁾，黒住 貴史³⁾，石田 充^{1) 3)}

1) 医療法人 誠和会 倉敷記念訪問看護ステーション

2) 医療法人 誠和会 倉敷記念病院 通所リハビリテーション

3) 医療法人 誠和会 倉敷記念病院 訪問リハビリテーション

【はじめに】

2050年には少子高齢化の進展と人口減少による労働力不足，経済成長の停滞，社会保障費の増加が挙げられている．在宅医療を推進することは医療費の削減につながるとして注目されている．在宅生活への復帰や継続するためには訪問リハビリ，訪問看護，通所リハビリ，デイサービス等の利用が重要となり，在宅復帰支援は高齢者や要介護者の増加に対応し，生活の質を維持・向上させるために重要な役割がある．在宅復帰支援とは医療機関や高齢者施設から退院・退所し，自宅に戻って生活できるよう様々な支援を行うことであり，社会保障費の削減，高齢者の生活の質の向上や介護負担の軽減，地域包括ケア病棟拡充に向けて益々在宅復帰支援が必要となってくる．そのため，在宅復帰支援を進めるためには在宅生活の状況を知ることは重要なことである．病棟療法士は退院後の生活状況，自身の行ったリハビリテーションや退院支援がどのように在宅に生かされているか知る機会が少ない．そのため，在宅リハビリテーションチームは令和6年3月より退院時同行訪問制度を開始した．また，在宅ケアの対象者は急増し，しかも重度化・多様化・複雑化しているため在宅リハビリテーションチーム内での知識の共有を目的に勉強会を開催したことを以下に報告する．

【活動報告】

1. 活動メンバー 4名(PT3名, OT1名)

2. 活動内容

i) 退院時同行訪問制度

患者・利用者満足度向上，病棟療法士の振り返りを目的に令和6年3月より開始し，同行者に対してアンケートを実施．

ii) 勉強会のテーマ

・第58回日本作業療法学会 Web 参加伝達

【活動の成果】

退院時同行訪問制度が開始しアンケート調査の結果、「表情も柔らかくなっていた」「歩行までは難しいと思っていたのですが、歩行器で歩いている姿が見れて嬉しかった」と訪問リハビリを導入したことでの患者・利用者の変化を感じる回答が得られた。また、「退院後の生活の中々見ることや知ることが少ないので、法人内で情報を共有できたり実際に訪リハに参加させていただいて貴重な経験になりました」「退院後の状況を知る機会が少なく、実際に退院後の生活を見る事ができるのは嬉しいです。病院だとどうしても患者さんとして見てしまいますが、生活の場で会うと「〇〇さん」と1人の人としての関りがチームでできてるように思いました。病院だと転倒しないように～、誤嚥しないように～と色々制限する事をまず第一に考えてしまうけど在宅だと、～ができるようにと考える事が多いのかなと感じました」と患者・利用者を見る視点の広がりを感じられ、訪問リハビリの導入を進めやすくなったと回答が得られる結果となった。

勉強会については在宅リハビリテーションチーム内で伝達を行い知識の共有を図ることができた。

【所感】

退院時同行訪問制度が開始となり病棟療法士へ退院後の生活状況、リハビリテーションや退院支援の振り返りから病院と在宅の繋がりを強化する目的で実施した。しかし、振り返ってみれば訪問リハビリの療法士も病棟療法士へ情報を伝えるために、利用者の情報の整理を行い、自身のリハビリテーションの振り返りとなり、在宅リハビリテーション質の向上に繋がっていると感じた。また、勉強会については個々のまとめる能力や伝える能力の向上、1人では膨大な情報を収集できないことをチームとして動き知識の共有に繋がり広く知見を広げるきっかけとなった。

【今後の展望】

今回の結果から患者・利用者の退院後の生活状況を知ることが在宅支援において重要であることを再確認することができた。また、訪問リハビリでは小児から高齢者まで幅広い利用であり、緊急時の対応も必要なため知識と技術が求められる。そのため、前年度実施した退院時同行訪問制度及び勉強会の継続により、在宅支援の強化、知識・技術の習得が訪問リハビリの質の向上に繋がると考える。